

書 評

永井義雄・柳田芳伸・中澤信彦編

『マルサス理論の歴史的形成』

只 腰 親 和

新著『マルサス理論の歴史的形成』に関する以下の書評については、編者から、所収の個別論文すべてに満遍なくコメントする底の模範的な形式に拘泥する必要のない旨の言わば「お墨付き」を得ている。そこで以下では主に「思想史的観点」から、また「辛口」による著者の皆さんからの反発も辞さずに（カッコの中の二要件も編者からの要望）、本書について私なりの立場から論ずることにした¹⁾。

1 マルサス再評価の動向

これまでの英国経済学の伝統的な歴史叙述においてはアダム・スミスの正統的後継者はリカードであって、そのリカードに対してマルサスはしょせん第二ヴァイオリンの役割を担わせられるのが通例であった。しかしそのような捉え方への修正は近年とみに急で、フランス革命の余波の頃から救貧法改正にいたる時期の英国の知的世界におけるマルサスの影響力の大きさに対する諸家の注目は、リカードへのそれを凌駕している。本書も最近の学界におけるそうした動向を反映した業績のひとつに数えられよう。

上に述べたような最近のマルサス「再評価」²⁾の理由としては以下のようなことが考えられる。

メインストリームの経済学の歴史に対してマルサスが傍流的地位にあったのは述べたとおりだが、現在にいたる経済学の過去の道程においてもマルサスが脚光を浴びたことがなかったわけではない。その点で誰しもが指を屈するのが、言うまでもなくケインズであろう。ただケインズの場合には自らの主要テーゼである有効需要の理論の先駆者としてマルサスを称揚するというのが、その基本的姿勢であった。つまり自分の理論的立場にひきつけてのマルサス評価であって、これは評価の方向こそ逆だがマルクスのマルサス把握とある意味で共通している面をもっている。これに対して近年のマルサス再評価の特徴は、そのような超越的な理論的裁断とはベクトルを異にしている。マルサスを当時の一政治、経済、宗教、思想等の一歴史的コンテクストに据え、その上で彼の理論や思想のたんなる時論にとどまらない普遍的意味を探り出していこうとするのが、最近のマルサス研究の基本的特徴である。マルサスに対してそのような光のあて方をすると、リカードのかげに隠れていた従来のマルサスとは違った、研究対象としての彼の相貌が現れるのも当然と言える。そう

いう点で、これまでのマルサス研究ではじゅうぶん注目されることがなかったが、最近掘り下げて検討されるようになった論点についてかんたんに振り返っておくことにしよう。

これまで時論との関連でマルサスが取り上げられる場合には、穀物法における地主利害の擁護者として、あるいは救貧法批判の論者としてそうされるのが基本であった。これをもう少し違った形で表現すれば、18世紀ではなく世紀が改まった19世紀の産業革命期のなまなましい英国の歴史的現実を光源にして彼のイデオロギー的立場を照射するのが主流的解釈であった。19世紀の歴史的現実の方からマルサスをみていくこうした姿勢は、1798年に初版が刊行された『人口論』についても例外でなかったと言ってよい。それに対して最近のマルサス研究の特徴は、『人口論』をそれが思想的反響を呼び起こした19世紀の側からだけでなく、その成立の前提となった18世紀の歴史の動向や思想の状況からも捉えていこうとする点にある。すでに最近の研究とは言えないが、『人口論』の重要な目的は…〔アダム〕スミスの進歩理論の反駁にあった³⁾とするヒメルファーフはその一例であるが、そうした潮流の研究が『人口論』と同時代の欠かせない出来事として注目するのが、フランス革命の英国への影響という問題である。

フランス革命が思想的な面で英国の知識人たちに影響を与えたことはよく知られている。その点で有名なバークのみならず、『人口論』の表題に革命と密接な関連を有するコンドルセの名前がふくまれていることからして、マルサスも「イギリスにおけるフランス革命」⁴⁾の問題と無縁ではないことは一般的にはこれまでも指摘されてきた。「イギリスにおけるフランス革命」との関連で本格的に『人口論』が問題にされるようになると、『人口論』でのゴドウィンやコンドルセに対する批判の眼目も、それが両者の完成可能性論のたんなる批判—それだけでは否定的、消極的な主張—にとどまらず、マルサスによる私的所有の積極的擁護にあったということが強調されるようになる。ウォーターマンが、「…われわれは、『人口論』初版の積極的な論議を、ゴドウィン体系を粉砕しようとするたんに否定的な論議と区別できよう⁵⁾」としているのは、そのことを意味している。つまりフランス革命という世界史的事象と絡めて『人口論』の主張が着目されることにより、そこでの私的所有論とか近代的結婚制度（一夫一婦制）論といった、現代にまでおよぶ息の長い論点前面に押し出されることになる。さらにこれを私なりに敷衍すれば、マルサスのゴドウィン、コンドルセに対する論駁には、社会に *misery* や *vice* をもたらすのは「制度」*human institution* か「人間的自然」*human nature* か、というきわめて根源的な問題が含まれていたことが明らかになってきたと言える。こうして比較的さいきんのマルサス再評価の特徴として、従来より意識的かつ精細に、「イギリスにおけるフランス革命」という文脈で『人口論』が取り上げられている点をあげることができる。

この動向と関連しているが、彼の神学思想への着目も最近のマルサス把握の特徴に数えられる。19世紀後半以降の「実証主義」的な常識的解釈にしたがえば、科学の一部門としての経済学は宗教から距離をおくことによつて、その科学性を立証することになるはずだが、マルサスの時代における経済学の在りようはそれとは異なっていた。その時代はまだ「宗教と科学が…一般に不可分で、

「自然神学が、そこに自然科学も道徳科学も隠れる shelter ことのできる有利な背景を提供していた」⁶⁾のである。そのような時代環境の下で自身、国教会の聖職者であったマルサス個人の経済学も、現代流の価値自由なそれではなく、神学と密接な関係をもつものであった。こうして、19世紀の30年代くらいまで英国で優勢であった思想潮流とされる、資本主義体制擁護の学としての経済学と英国国教会の神学思想の融合体としての「キリスト教経済学」という理論的枠組みの枢要な人物としてマルサスが注目されているのである。経済学を宗教と関連づけることは、とくに日本では馴染みにくい考え方だが、これを近代科学の特殊歴史的特質の把握という方向で捉えれば現代においても（あるいは現代においてこそ）リアリティをもつ課題と言える。ともあれその神学思想への着目を、最近のマルサス研究の大きな流れとして指摘できよう。

最近のマルサス研究の主要な特徴は上のような点にあると思われるが、翻って本書をひもとく時、この書物が全体としてこうした研究動向に鋭敏に対応しているとはみなし難い。そのこと自体は難点ではなく、この種の書物について当然に推測される各論文の字数の制約という事情を考慮すると、本書を構成する各論文が全体をつうじて手堅い実証を心がけていると思われることが、本書に共通する性質である。

2 本書全体の企図に関して

本書の「序」（永井義雄執筆）が、本書ぜんたいの意図やねらいを明らかにしていると思われるのではじめにこの部分を基に、この書物の企図にかんして評者の見解を述べたい。この書物を上梓する機縁となったのは、今年が『人口論』第2版の出された1803年からちょうど200年目に相当するからのようである。そして『人口論』については、「書物の趣旨と分量からいって、第2版はその後の諸版の基礎であるが、初版はそういうものとはみなし難い」（ii ページ）という立場から、「マルサス『人口論』、とりわけその第2版が200年記念を迎える今日的意味、さらにはマルサスの全体系の意義を歴史的に追及」（vii ページ）するのが本書の目的と思われる。すなわちこの書物は、『人口論』とならんで同じ著者の『経済学原理』をも対象にはしているが、永井の説明に従うかぎり、大きな関心は何よりも『人口論』の第2版にあると思われるが、このように『人口論』の第2版につよい力点を置くとする本書ぜんたいの基本的立場に関する永井による言明について、評者は以下のように考える。

まずはじめに永井の言葉を字義どおりに解釈した上で、すなわち本書を構成する諸論文それぞれの内容が『人口論』の特に第2版に何がしかアクセントを置いているというのが事実だと仮定して（実態は必ずしもそうではないことは後述）、その点について私の見解を述べると、たしかに永井も引用しているように、『人口論』第2版が初版に比較して「新しい本」であるとマルサス自身が言っていたことは周知の事実である。第2版において道徳的抑制という考え方が導入され、さらに永井が説明しているように、「初版が提出した人口原理は、もともと帰納的に引き出された原理ではない。それは証明されなければならなかった。第2版以降の諸版がこの役割を果たそうとした」

(ivページ)とする、一種の方法論上の転換ないし洗練も、初版と第2版との相違を物語っている。しかしそのような『人口論』の初版と第2版との関係についての常識化した理解に基づいて、初版と第2版（以下）を単純に切り離すことがこの書物をただしく解明するのにふさわしい手続きか否かについては、疑問をもたざるをえない。初版に比べて2版以降が「冗漫にして無意味な繰り返し」とすでに早くコールリッジにみなされていたことは、ケインズが伝えているところである⁷⁾。そうした片言隻句は別にしても、マルサス理論の「歴史的形成」と銘打った本書が、『人口論』初版と後続版との歴史的変化をたんねんに跡付けているのならば格別、必ずしもそうでないとなれば『人口論』が「最初に」執筆された当時の時代状況の中で、この書物の主張や含意をさぐっていくというのが、本書のタイトルに適合した解明の手続きではないだろうか。例えば上に述べた私的所有あるいは近代的結婚制度の問題は初版から枢要な位置をしめており、かつ『人口論』の「歴史的形成」を考える上で見落とすことができない論点である。その点で、第1部にゴドウィンに独立の章が割かれていないのは象徴的である。ゴドウィン抜きに、永井の言うように「マルサス理論の歴史的形成過程を多面的に明らかに」(iiページ)することが、果たしてできるのだろうか。

他方、上のような疑問にもかかわらず『人口論』第2版にことさらアクセントを置くとする本書の立場をかりに認めるにしても、今度は本書が実際にその路線で貫かれているか否かについて首を傾げるほかない。直接に『人口論』を対象としていない第2部の「マルサス『経済学原理』の歴史的形成」の部分についてそのことは問わないにしても、『人口論』そのものを問題にしている第1部の個々の論文についてはどうであろうか。たしかに永井自身による「第2版『人口論』のウェスター、ウォーレス、フランクリン」はそのタイトルが示すように、本書ぜんたいについて述べた永井の意図を裏切っていない。また嘉陽英朗の「マルサス人口論と18世紀医学」にも、第2版と初版の相違についての興味ある叙述が見える。しかし例えば中澤信彦の論文「フォックス派ウィッグとしてのマルサス」は、その冒頭で「初版『人口論』はいかに成立したのか？本章は、マルサスの政治的党派性に焦点を合わせて、この問題に接近する」(76ページ)と明言しているとおり、中澤に『人口論』第2版にたいする別段の関心はない。もとより評者は中澤の上のような問題の立て方の無用性を云々しているのでは決してないし、後にも述べるように中澤のこの論文は『人口論』の「歴史的形成」をある面で論じている。だが、永井の説明をたよりに本書全体の企図を探ろうとする時の戸惑いを否定することはできないのである。

同じ「序」の部分で永井は所収の個別論文ひとつひとつについて要約的説明をした上で、「以上が私なりの本書の全体像である」(xiiiページ)と述べている。しかし、この「全体像」という言葉にかんたんに肯くことはできない。というのは、それぞれの論文について簡潔にまとめてあることには敬意を表すが、永井の叙述を何度か読み返しても、個別の諸論文の総体が、全体として個別をこえて永井の表現するような「像」として切り結んでこないのは、評者の理解力の不足だけが原因とは言えないように思うからである。たしかに、それぞれ独自の問題意識をもつ複数の専門家がひとつの書物を作り上げていく際の困難は想像に難くない。しかし同じ共著の書物でも例えば

「退職記念論文集」というような場合には、執筆者相互の問題関心が交差しないまま寄せ集めの論文集になることもやむをえないと言えようが、永井の解説から察する限り、本書は目的意識的に構成された研究組織の研究成果であると思われる。とすれば、いま少しぜんたいの意図が読者に自然に伝わるような内容でないと、一定の目的の下に編纂された共著である本書の価値は減殺されるのではないだろうか⁸⁾。

3 本書の内容に関して

以下で個別論文の内容に論及していくが、上の1, 2で述べた私自身の関心や評価に基づいて第1部の論文を対象にコメントすることにした。

2で論評した本書の企図に、もっとも合致していると思われるのが嘉陽論文である。この論文は、『人口論』の背景となるマルサスの医学的知識に関して、『人口論』以前、その初版、および第2版以降にわけて分析しており、嘉陽にとっての固有の課題である医学知識について初版と第2版の相違を具体的に明らかにしているからである。初版に関してはゴドウィン、コンドルセに対するマルサスの批判を一般的にではなく、医学の側面から検討し、ついで『人口論』の「改版」(60ページ)によって医学関係の記述がどのように拡張されたかについて説明している。嘉陽によれば第2版で追加された医学関係の記述は、病因論と、ジェンナーによる種痘の発見に代表される医学進歩の考察の二つに区分できる。前者にかんしては、マルサス自身の北欧、ロシアへの旅行体験が基礎にあることが指摘されている。後者については種痘の発見のような医学や衛生学での進歩も、マルサスの人口論的主張に修正をもたらすものではない点が説明されている。人口の問題を考えるためにはこの論文が検討しているような医学的、衛生学的なアプローチは、かんたんな作業ではないが不可欠である。先駆的な試みとして評価できよう。論文の末尾で嘉陽は、『人口論』は「まぎれもなく啓蒙の最上の影響を受けたものとして高く評価されうる」(68ページ)と言っているが、マルサスと啓蒙思想の受容と批判の関係はさらに検討される必要があるだろう。また、『人口論』におけるマルサスが、「人間に関わる現象を自然法則にもとづく物質現象に…還元する」、「還元主義的な人間観」(57ページ)を採用したとする興味ある解釈をしているが、この点は重要な論点であるだけにもう少し立ち入った説明や論証が必要であろう。

永井論文は先に述べたように『人口論』の第2版に力点をおいた課題追求をしている。この論文では第2版でのウォーレス論が中心的に取り上げられ、2版でウェブスターの人口統計調査やフランクリンの人口論文への言及が付け加わったことが付随的に述べられている。ウォーレスとマルサスの関係についての永井による解説の(少なくともひとつの)眼目は、マルサスがウォーレスの「ユートピア構想」を誤解したことにある。すなわち、ウォーレスが「ユートピアの構想が無駄であることを論証するためにユートピア構想を論じた」(138ページ)という「巨大な皮肉」(140ページ)を、マルサスは理解できなかったというのである。この、ユートピアの失敗のためにユートピアを論じたとするウォーレス解釈は傾聴に値する。しかし、ウォーレスを誤解したのはマルサスの

みならず、後世の研究者であるラスキ、永井自身、ロビンズも同様の旨である説明がある。過去の自説の誤りを率直に認める永井の誠実さは理解できるが、マルサスならぬそれら後世の人々についての叙述が相当の部分を占めるため、論文の主題であるはずのマルサスによるウォーレスの誤解の問題が背景にしりぞいてしまったきらいがある。

森岡邦泰「マルサスとフランス社会思想」は、マルサスとコンドルセの関係について論じている。コンドルセは『人口論』初版に名前が挙がっているにもかかわらず、マルサスとの関係についてこれまで「研究が手薄」（43ページ）であったと言ってよいが、比較的最近の研究では、一括して論じられがちなゴドウィンとコンドルセの相違を指摘するような精細な論議もなされている⁹⁾。森岡の場合も『人口論』におけるコンドルセに関する記述を平板に紹介するのではなく、「マルサスの叙述はコンドルセの正確な読解というよりも、そこにある種のバイアスがかかって」おり、そのバイアスを「検討していくと、マルサスの価値観、社会観、人間観が浮かびあがってくる」（29ページ）という立場から、分析的に『人口論』のコンドルセ論を解明している。例えば、文明社会における労働者階級の存在それ自体の必然性や、その階級が「不平等、従属、不幸」の状態にあることについて、マルサスはコンドルセを引き合いに出したり、一言一句を逐語訳で引用したりしているが、それはコンドルセの原典の文脈に忠実なものではなく、自らの労働（者）観を正当化するためにコンドルセを引証している次第が明らかにされている。このようにマルサスのコンドルセ読解に関して、マルサスがコンドルセとは「微妙な意味合いの違い」（33ページ）のある発言をしたり、「コンドルセの論旨からずれたことを述べ」（34ページ）たりしていることが、私有財産論、労働観、救貧法等にそくして具体的に跡付けられている。そこから特に斬新な結論が引き出されているわけではないが、コンドルセ—マルサス関係の内在的な分析をしたものとして評価できよう。

森岡論文がテキストに内在してコンドルセ—マルサスの関係を捉えていたとすれば（内部史的接近 *internalist approach*）、中澤論文は、『人口論』初版をその成立当時の、政争というのがふさわしい政治的コンテキストで考察した（外部史的接近 *externalist approach*）成果である。ジョージ3世治下、ノース、フォックス、ピット等を登場人物にして繰りひろげられる英国政界の目まぐるしい権力の転変が、フランス革命の英国への影響もまじえてたんねんに描かれている。そうした背景の中でマルサスが父と交わした書簡や彼の『危機』論文を中澤が分析する意図は、ウィンチの「マルサス＝フォックス派ウィッグ」という規定が妥当か否かの検証にある。結論としてその規定は肯定されるが、さらにマルサスのそのような政治的立場と『人口論』の関係が問われることになる。中澤によればウィッグは伝統的に専制を嫌悪し、自由を擁護してきたが、当時のフォックス派の人々には「市民的自由」の認識はあっても、「経済的自由」という語彙は欠けていた。『人口論』のマルサスは「経済問題＝人口問題」に自由概念を適用することによって、「フォックス派を超えるフォックス派」（93ページ）であったというのが中澤の結論である。

興味ある解釈であるが、本論の主題部分、したがってそのメリットは『人口論』そのものの分析というより、その前史の解明にある。パークに次いで「イギリス保守主義の二番打者マルサス」¹⁰⁾

というのが通説的理解であるのに抗して、「自由主義者マルサス」とも言うべき結論を正当化するためには『人口論』の内在的検討が必要であろう。中澤はマルサスが、「フランス革命に対する全面的な批判者ではなかった」とする自説の根拠として、マルサスのフランス革命に対する批判はゴドウィン、コンドルセ、ペイン等の「革命と直接・間接に関係するイデオロギーに対する批判」であって、「革命の現実の進行過程」（88ページ）に対するものでなかった旨の議論をしている。ひとつの解釈とは言えるが、現実とイデオロギーがそれほどはっきりと区別されるならばイデオロギー批判の意味はどこに存するのだろうか。

1で述べた最近のマルサス研究の動向との関係から、本書に集録された論文のうちで評者が関心をもつもののひとつが、大村照夫「ウィリアム・ペイリーの義務論」である。この論文が、本書中ではマルサスの神学思想と最も関係をもつと期待されるからである。永井も言うように、わが国のペイリー研究はいまのところ「孤独な解明を進め」る（xページ）ほかない段階であって、その点でペイリー義務論の個別論点と、それに照応するマルサスの主張を比較検討している大村論文の意図は了解できる。しかし大村のマルサス解釈において、重要な役割を担っているだけでなく、文脈に応じて多様な含意を有している「自然法」概念の用法には疑問が残る。近代社会科学の中核概念として、わが国においても海外においても蓄積された研究があり一定の定着した理解もある「自然法」について、その学派的系譜や文献的裏付けの論証ぬきに、マルサスのその概念について断定的に論定することは問題があろう。例えば、大村は、「マルサスにとって扶養義務は自然法であり、結婚制度から派生する自然法である」（118ページ）と言っているが、「制度から派生する自然法」と言うのは理解が困難である。また嘉陽が述べているような「経験主義的」な「自然法則」（59ページ）と、大村の言う「自然法」とがマルサスにおいてどのような関係にあるのかについても立ち入った検討が必要であろう。

本論では論及されていないが、ペイリーとマルサスの関係を追求する際には、マルサスにおける神義論の問題が重要である。マルサスは、神の全能性とこの世の悪の存在とが矛盾しないことを説く神義論に関して、初版では非正統的な「精神の成長」論を唱えたが、第2版以降はそれを国教会から受容可能な「試練の状態」論に立場を変えた。それは論者から「ペイリーの路線に沿った」¹¹⁾変説とされているが、先にも述べたように本書が『人口論』の第2版にアクセントを置くものとするれば、ペイリーを論ずる場合にこの論点の検討は見落とせないのではないか。

以上、冒頭に述べた編者からの「お墨付き」にあまえて、自由なコメントをさせて頂いたが著者各位の寛恕を請う次第である。

（注）

- 1) 以下の人名については敬称略。各論文のタイトル名は最初に言及する時のみに記し、二回目以降の言及では執筆者名を用いて○○論文という形で示す。また文中カッコでページ数のみを記した引用は本書中からのものである。
- 2) この表現は Waterman の以下の論文の表題にある。Waterman, A.M.C., "Reappraisal of 'Malthus the Economist,'

1933-97" *History of Political Economy* 30:2, 1998.

- 3) Himmelfarb, G., *The Idea of Poverty*, 1984, pp.107-8
- 4) この表現は以下による。水田洋「イギリス保守主義の意義」、『世界の名著34 パーク、マルサス』、中央公論社、1969年、20ページ。
- 5) Waterman, A.M.C., *Revolution, Economics and Religion*, 1991, p.16
- 6) Winch, D., *Riches and Poverty* 1996, p.23
- 7) Keynes, J.M., *Essays in Biography*, 1933, p.85. 大野忠男訳『人物評論』（『ケインズ全集第10巻』）東洋経済新報社、1980年、115ページ。
- 8) 堀田誠三の「オルテスの経済思想」は、通常の経済思想史ではまず論じられることのないオルテスの経済思想を紹介するという点で啓蒙的意義をもっている。だがこの論文がオルテスとマルサスとの関連をほとんど分析することなく、その掉尾が、「『人口論』第10章で表明された問題設定そのものが、オルテスには想定することさえありえない事態であった」（24ページ）という表現で閉じられていることは（堀田論文以外にもマルサスへの実質的な接近がほとんどない論文が見られる）、永井の述べている本書の意図や目的とその現実が必ずしも一致していないことをはからずも示していないだろうか。
- 9) Winch, *op.cit.*, pp.250-1
- 10) 水田洋前掲書、26ページ。
- 11) Waterman, 1991, p.145

（昭和堂、2003年6月刊、xxii + 299 + v ページ、3,000円）